

いしかり 曆よみ

- 花崎古老昔語り—尾田アサヨさんの巻……………吉本 愛子… 2
- 花崎団地、の野鳥について……………畑宮清一郎… 6
- 昔の物の値段……………金子 伸久… 8
- 果樹栽培の奨励……………金子 伸久…11
- 鮭と鱈の昔話……………福田 俊市…14
- 石狩平野の雁をめぐって……………黒田 晶子…15
- 生振古老物語……………前川 道寛…19
- 南線地区（現花田北）の昔と今—阿部重利さんに聞く—……………駒井 秀子…21
- 石狩町の町村名（大字・字）について……………田中 實…29

第 4 号

石 狩 町 郷 土 研 究 会

1984, 2月

ごあいさつ

会長 山口 福司

このたび、八月二十九日の総会で、図らずも、本当に図らずも、会長をお引き受けするようなことになってしまいました。

道内でも有数の古い歴史を持つ石狩町、そして、すでに立派な研究の成果を挙げておられる、先達の多いこの会の会長とは、とてもとてもおこがましくて、再三再四お断りしたのですが、ついに押し切られてお引き受けする羽目になってしまいました。それだけに大変責任を感じています。幸に副会長をベテランの駒井さんにお引き受けいただき、理事にはいままでの幹部の皆さんにお引き受けいただき、それぞれの方々に支えられ、お導きをいただきながらと言うことでお引き受けいたしました。私は石狩町の住人となってまだ日も浅く、石狩町の長い歴史からみればほんのささやかな存在です。縁があつて石狩町に永住することになりました。特に意識した訳ではないのですが、自然に抵抗なくこうなりました。本当にこれも何かの縁なのでしょう。

北の母なる川「石狩川」の河口の町に何かロマンを求めていました。古い歴史と新しい町造りの渾然とした興味のある町でした。我が住む町のふる里を識りたくて、早速郷土研究会に入会しました。貪欲に吸収しようとしてどこへでも顔出し、口出しをしたのが、私が何か熱心のように受けとられたのでしょうか。何はともあれ、これを機会に歴史の宝庫の町に住める幸せを身を感じ、少しでもお役に立ちたいものと、およばずながら立派な先輩の業績に少しでもプラスになるようにと心懸けています。どうか、よろしくおねがいたします。

花畔古老昔語り

—尾田アサヨさんの巻—

吉本愛子

「わたしの事を書くのなら厚い本が一冊出来るかもしれないよ……なんせわたしは三十三才で男になった人間なんだから」と言いながら私を居間へ通してくれました。一瞬その言葉の意味を理解できないうでいる私を見て、彼女はさも可笑しそうにコロコロと笑いました。さて、この愉快なおばあちゃんからどんな昔話が飛び出すことでしょうか。

彼女のお名前は尾田アサヨさんといい、七十年近くもこの花畔に住み農業一筋に生きてこられた方です。畑作農業から水田農業に移り変ったこの村で約四十年間に及ぶ稲作農業を体験され、そして現在、石狩湾新港開発のため水田が再び姿を消し、工業用地や住宅団地に変貌した郷土の姿をずっと見守ってこられた訳で、大正以降の花畔を知るためにはとても貴重な存在といえるでしょう。

彼女は明治四十年十二月一日夕張郡角田村雨煙別という所で、やはり農家の長女に生まれました。父母とも香川県出身で谷藤次、スエといい、夕張に入植したが、其処での農業は色々な事情からうまくゆかず、小学校三年の秋に両親と弟妹の一家五人でこの花畔に移り住

んだという事です。当地には明治二十七年三月に香川県から移住した母親の兄、内海秀太郎さんがいて、極東農場の小作に入るよう手続きをして呼び寄せてくれたのでした。

場所は昔の南九線、今でいえば、花川北一条の花畔団地の一部となっているが、ここで家一戸とエア―シャー種の赤茶色の乳牛一頭と畑が八町四、五反与えられ燕麦、亜麻、小麦、碗豆などを作っていた。畑の手伝い、ここで生まれた妹の子守の為などからもう学校には行かせてはもらえなかった。秀太郎さんはとても良く面倒をみてくれたそうで、一時お世話になっていた時、大きな鍋で芋を煮て、芋餅を作り、黄粉に黒砂糖をきざんだものを塗して食べさせてくれ、その美味しかったことは、今でも忘れられないと懐かしそうに話されました。今の子らは勝手に遊んでばかりいるが昔は違ったもんだ。家の為に生活せんが為に大人と一緒に働いたもんだ……と現代の過保護社会の子らには是非かせたいお話が続きます。

冬は冬でランプの下でさしこをした。地下足袋もゴム長も無い時代だから、足袋の底に当布をして一針一針底刺をして深沓を作り、それを何足も用意して夏の農作業に備えた。

それから冬の間、燕麦ガラ（糞）で壘苞作りもした。札幌の麦酒会社で亜麻糸を幹旋してくれたが、彼女の家では製麻会社から亜麻糸の屑を買って継いで使用した。どこの家でも家族中で燕麦ガラに埋まりながら炉端でビール壘一本入る苞を、慣れてくると一日百枚以上は編んだ。一枚二厘五耗から後には五厘で買い取ってくれるので、それを百枚ずつ束ね、家族の多い家だと何千枚にもなるので、

それを馬糧に積んで麦酒会社まで行き、お金に替えた。「ゴリンという字書けるかい？」とペンを走らせる私を見ながらアサヨさんは笑います。大正時代の五厘が一体今のいくらに相当するのでしょうか。男たちが襦袢を売ったお金で買物をした後、一杯五銭のかけそばを食べて帰るのが楽しみだったという事です。

学校には行けなかったが、冬期間、花川小学校六代目校長大村栄三郎先生の家に行儀見習いとして通い、そこで字や裁縫を覚える。

それ以外は本当に働くだけの子供時代だったそうで、その中でたった一つの楽しかった思い出は、いとこたちと朝早く金輪の馬車にカタコトと揺られ、二時間もかかって円山公園までお花見に行つた事だそうで、「それが本当に嬉しかったア！」アサヨおばあちゃんには感情を込めて泣きました。

ここで娘時代のお話をひとつ紹介します。二十三才の秋、トラホームにかかり札幌の階明堂という眼科に入院中、そこで仲良くなつた友人と職業安定所に行き職を探し、その日のうちに住込みの姐やになつた。結局入院中と判りタクシー代を貰つて帰されたのだが、その道庁に勤める梶浦という家の奥さんに入れられ、そこで病院から退院したばかりのお年寄の付添婦として奉公する事になつた。

月給が拾円、電車賃が七銭だった。姐やさんと呼ばれてこの家で働いた四ヵ月程が、後で考えると花嫁修業となり、三月には母が嫁にやることになつたからと花畔から迎えに来た。二十一だと言つていた歳がバレてしまつたが金紗一反、コート生地などのお祝いを持たせてくれた。家に帰り次の日には結納があり五才年上の尾田勇さ

んと四月には式を挙げた。

夫となつた人は次男でしたが、独身の兄（婚約者は居た）、五人の弟に姉と妹という大家族だったそうで、今の若い人には想像もつかない新婚時代です。それも四畳半の夫婦部屋を与えられているうちは良かったのですが、兄が結婚するとその部屋を出され居間で寝起きしなければならなくなつたから大変です。夜は家族全員寝てしまふまで布団は敷けず、朝はだれも起きないうちに布団をあげなければなりません。結婚は後でも長男の嫁は嫁として朝一番に起き、アサヨさんも嫁としては先輩であるから寝顔を見られまいと早く起きる。やがて長男と次男の嫁さんどうしが張合つて、しまいには三時四時に朝起き出すようになったそうです。「あの頃はわたしも若かつたねエ」アサヨおばあちゃんはどんな苦労話も笑顔で語つてくれます。これでは嫁さんたちの身体が持たんと、現在も居住している北十一線に家を建て分家させてくれた。

おかげで結婚以来一年ぶりで夫婦水入らずの生活が始まる。鍋二つ、茶碗、三平皿、小皿等の食器が五個ずつ、それに瓶に味噌と四合壺一本に醤油を貰つての新世帯でした。

分家はしても農作業は本家と一緒だったから、自宅から畑に通う分早く起きなければならなかつた。新琴似の畑で燕麦刈りが始まると藁小屋を建てて中に藁を敷いて其処に泊り農繁期を過ごした。だが夜半に鼠が這い廻り、彼女はその度に悲鳴をあげて、他の人の目を覚ましてしまうものだから、アサヨさん夫婦は自宅から通うようになった。新琴似の畑に着く頃丁度朝日が出るように馬車に乗つた。

昭和二年花畔北十線に五十七町歩の造田が計画され、翌年二十八町歩が試作、収穫を挙げる。本当はもつと前から計画はあったのだが、砂地に水田を造るのは無理な事と道庁が仲々水利権を認可してくれなかった。

砂地でも米は収穫できる事が実証され、昭和五年八月花畔土功組合設立、花畔、南線両地区で約八百町歩の造田を計画。この頃から花畔は畑作農業から水田農業へと移行し始めたのでした。

昭和六年アサヨさんは、大きなお腹で畦造りに出て働いた。この年彼女の家では一町二反ほど田を作ったが冷害のため四、五俵しか米はとれなかった。七月に十二線まで競馬を親に行くのに、綿入れ絆てんを着なければならぬ程、寒い年だったそうです。

本家では以前から屯田兵村の方で水田を作っていたが、夫は治水工事で働いていたため、田圃には全くの素人で、彼女が長男久男を産んだばかりの身体で、田の水を見廻って歩き、途中で目を廻して倒れた事もありました。

物は買わず作らずで辛抱する事が、収入の少ない家で生きてゆく為の条件だった。十銭でみかんが五、六個きたが、それは病人だけが食べる物だった。昭和九年には次男義雄が生まれたが四才の時、風邪から肺炎になりそれが膿胸という病気になる、父親から輸血をしてもらい助かる。次男が良くなると長男が急性腎臓炎になり顔が浮腫尿も出なくなった。この時も入院して夫の血を輸血した。

母親の血を採って付添が出来なくなつては大変だという事だった。寒いからと一枚着る事も、暑いからと脱ぐ才覚も持たない幼ない子

らを置いて働らきに行くものだから、息子たちはいつも病気がちだった。

水田の耕作面積もだんだんと広げ三町五反ほどになったが、これ迄にするには大変な苦勞があった。尾田さんの土地は、南側には銭函まで通じる運河、西側には深い排水溝がある角地であったため、ただでさえ砂地で水捌けの良い土地は、策のように水が逃げ出してしまい、尾田の田圃は水を余計食うと文句を言われた。そのため土地改良の試験田圃となり、石狩川が固く凍りつく厳寒期に客土をずる事になった。石狩川のむこう（生振）から治水工事で掘りあげた粘土質の土を一反に馬糞六十台ずつ入れたのである。青年団の人たちが請負ってくれ、川の水が締っている朝三時頃から仕事が始まるので、朝日がのぼる頃泥炭ストープにみそ汁を煖めて朝食をとつてもらった。そして午前十一時頃迄に六往復ぐらい運んでその日は終るのだった。

粘土を入れ、床締めをしてからは、水漏れの心配もほとんど無くなり、それからは何処にも負けない良質米がとれ、種粃を依頼されるようになった。

しかし、造田という肉体的にも厳しい苦勞が続いたためか次男が小学校にあがるという年の正月、夫は腹膜炎で倒れ天使病院に入院する。四月、彼女の妹に連れられて、学生帽にランドセルの新一年生の晴姿で見舞に来た息子を嬉しそうに見ていた夫は、間もなく息を引きとった。「夫は二人の息子を助けて、死んだ様なもの」と彼女が言います。

この時アサヨさんは三十三才でした。

結婚して十年、砂地と水とそして冷害とも闘いながら、水田作りもどうにか軌道に乗ってきた矢先の事であった。それからの彼女は、一家の支柱として文字通り男になつたつもりで二人の子どもを育てた。

かまどの心配ばかりしていたものだから、農協の集まりなどで同席した婦人たちとの、子どもとか着物とかの女性的な話は上の空、傍で男たちが話している三才馬がいくらで売れたとか、お米が何等米になつたとかいう話に耳を傾けていた。

夜鍋仕事で田に出る時、上の子はマントを抱え藁を引きずつて、下の子は南瓜と芋の入った箱を抱えてついて来て、仕事の終るのを待つていた。東からのぼった月が西に傾くまで夜露に濡れながら稲束を作った。そのうち息子らは、箱のおやつを食べ、藁の上でマントを被つて眠つてしまふ。仕事が終ると馬を連れ帰り、牛を連れ帰り、そして子どもを一人ずつ連れて、まるで母猫が仔猫を運ぶように幾度も往復して家に帰った。女手一つで一日の農作業を終えた時には、寢床に入るのも面倒なほど疲れ果て、そのまま居間で横になり朝を迎えた事も度々でした。

冬に雪の多い年だと軒の低い昔の家は一晚ですっぽりと雪に埋つてしまふ。息子を学校に送り出す時は窓を開けてまず部屋の中に雪を取り入れ、それから穴をあけてトンネルを作り戸外へ出た。時には馬糞で学校まで送り家の周りの除雪を済ませると、もう学校に迎えに行く時間になつていた。学校のない日、家の中でじつとしてい

たら、本家のじいさんが屋根に上つて煙突の穴から「おーい生きてるかい」と声をかけてくれたつけ……。

アサヨおばあちゃんの昔語りには、本当に本が出来るほど興味深いお話が盛沢山でした。利尿剤には病院の薬より、とうきびを黒く炒つたものを煎じて飲ませた方が良く効いたとか、仕事から帰ると息子たちがいつもの遊び仲間と座敷いっぱい土を盛り上げ花を植え父の墓をこしらえて遊んでいたとか、まだまだ内容の濃いものでしたが残念ながらこの場は一応終りとします。

今北十一線地区は農住団地として区画整理され、緑ゆたかな田園風景も、黄金の稲穂が波打つ秋の景色も昭和四十七年を最後に見られなくなりました。

現在尾田さんでは、長男夫婦が七棟のビニールハウスで、トマト、胡瓜、セロリ他、露地栽培でアスパラ、メロン等、そ菜専業農家として跡を継いでおられます。

彼女は手伝っているつもりが迷惑をかける事になつてしまふので今は隠居の身。老人クラブの仲間と温泉に行くこともあります。

「よくこれ迄生きて来たねエと言われるが、知らん間にこの歳になつてしまつた」そうです。

長い間苦勞ばかり多かつたアサヨおばあちゃん、これからはのんびりと楽しい老後を送つて下さい。この会誌を届けるまでには、日にちががかる旨お話しすると「そうかい、それじゃまだ死なれんねエ」とアサヨさんは又ココロと笑いながら、私を見送つてくれたのでした。

『花畔団地』の野鳥について

畑宮 清一郎

私は、昭和五十二年以来、石狩町花川北五条三丁目に住住している。この地域は、『花畔団地』と呼ばれ、私はその北東端に住んでいる。東側に南花畔通をへだてて紅葉山砂丘、南側に団地内を東西に横断する防風林があり、四季を通じて野鳥をみることが多い。朝夕のバス停への往復、休日の散歩などの際、観察した野鳥を紹介したい。

▽春——晴天を告げるヒバリ

毎年、三月三十日前後、北陽シヨッピングセンター東側の空地（アパート建設予定地。現在は草地）でヒバリの初鳴きをきく。

朝、ヒバリの鳴く日は、おおむね晴天となり、気温も高い。

ヒバリは、三月下旬ごろ南の国から到着するが、寒い日は街路樹の下の枯れた芝生の上などをはい廻っているの、一見スズメと見違うことも多い。

このころ、南花畔通り沿いの排水溝の土手をハクセキレイが、せわしく飛び廻る。水辺を好む鳥なので、付近に営巣するものと思わ

れる。ハクセキレイは、春から夏にかけて、庭の菜園にもよくやってくるので、スズメに次いで目にふれる鳥である。

四月から五月にかけては、ウグイス、アオジ、ホオジロ、ホオアカなどのさえずりがにぎやかとなり、バードウォッチングには絶好の季節となる。

▽夏——しじまを破るヨタカ

夏の主役は、カッコウ、オオジシギ、ヨタカの『三人組』であろうか。

夜明けとともにカッコウの声が、初夏のさわやかな空気にアクセントをつける。

昼間は、オオジシギが、独特の羽音をひびかせて高空からの急降下をくり返す。

太陽が西に沈むと、東の森の奥からヨタカが、夜の訪ずれを告げる。終バスをおり、夜道を帰宅するのを迎えてくれるのも、しじまを破るヨタカの声である。

ホトトギスによく似た声のエゾセンニュウは、夜も昼もよく鳴いている。夜、きくと、「ジヨツピンカケタカ」ときこえるのもおもしろい。

▽秋——森のレデイ、シマエナガ

早朝、南花畔通りを散歩していると、数羽の白っぽい小柄な鳥が地上すれすれに飛んできた。シマエナガである。ほっそりした容姿

は可れんである。いつも黒い蝶ネクタイをしめているシジユウカラを森のジェントルマンとすれば、シコエナガは、森のレディであらうか。

夏鳥がすっかり南へ去って防風林や、紅葉山砂丘の木々が美しく紅葉するころ、団地の上空をさまざまな渡り鳥が通過していく。

コムクドリの大群や、トビの飛しようが目立つのもこの頃である。茨戸川まで足をのばせば、マガモやコガモなどをみることもできる。

▽冬——電柱のアカゲラ

大雪の朝、除雪をしているとキツツキの音がする。みると、自宅の前の電柱にエゾアカゲラがとまっている。三回ほどコンクリートの電柱をつついていたが、まもなく飛んでいった。

暖い晴れた日に、黄色い冠毛をなびかせてキレンジャクが十羽ほど自宅の庭にきたこともあった。

寒い朝、バス停の前でハイタカをみた。ゆったりと飛ぶ姿に風格があった。

不十分ではあるが、これまで観察した野鳥を、一応別表にまとめておいた。

花畔団地付近は、自然環境からみて、山林の鳥、草原の鳥が主であるが、湿原の鳥もあり、茨戸川まで行けば、カモメの類、ガン、カモの類など多数の野鳥を観察することができる。

それにしても、団地内の防風林を伐採せずに残した先人の卓見に

心から敬意を表したい。最近、防風林内の下生えを刈りとって遊歩道をつくれ、という意見もあったときが、私たちの子孫のため、防風林はぜひ残しておきたいと願っている。

(筆者は、公務員、日本野鳥の会札幌支部、北海道文化財保護協会、北海道地方史研究協議会、北海道考古学会の各会員)

花畔団地の野鳥

No.	科名	種名	No.	科名	種名
1	ムクドリ科	ムクドリ	18	ヒタキ科	キヒタキ
2	"	コムクドリ	19	ウグイス科	ウグイス
3	キンバラ科	カラフトスズメ	20	"	エゾセンニュー
4	アトリ科	カラフトカワラヒワ	21	"	センタイムシクイ
5	"	アトリ	22	キツツキ科	エゾアカゲラ
6	"	アオジ	23	ホトトギス科	カッコ
7	"	シメ	24	"	ツツドリ
8	セキレイ科	ハクセキレイ	25	ハト科	キジバト
9	シジユウカラ科	シジユウカラ	26	シギ科	オオシシギ
10	"	ヤマガラ	27	"	ハマシギ
11	ヒバリ科	ヒバリ	28	キジ科	コウライキジ
12	エナガ科	シマエナガ	29	ヨタカ科	ヨタカ
13	ホオジロ科	ホオジロ	30	ワシタカ科	トビ
14	"	ホオアカ	31	"	ハイタカ
15	モズ科	モズ	32	カラス科	ハシブトガラス
16	レンジャク科	キレンジャク	33	"	ミヤマカケス
17	ヒヨドリ科	エゾヒヨドリ			

2月5日	3円25銭	白米	1俵	1月7日	3銭5厘	麦粉	1斤	11月23日	80銭	農会費
2月4日	17銭	酒	1升	1月3日	6銭	ハガキ	6枚	11月16日	2銭2厘	味噌
1月18日	7銭	草トリ器	4本	○明治二十八年				11月3日	25銭	酒
1月10日	72銭	塩引	2枚	12月9日	16銭	函館より青森迄 汽船貨	4升(収入)	11月16日	31銭5厘	空俵
1月7日	4銭	郵便切手	2枚	12月4日	90銭	青森県戸ノ口 1泊代	1泊代	11月3日	3銭	洗濯シャボン
○明治二十四年				10月7日	24銭	小麥	4升(収入)	10月22日	15銭	ホッキ貝
12月31日	1円45銭	ガラ(馬の道具)	1本	8月31日	25銭	戸数割(税)		9月14日	10銭	寺(志(お盆))
12月12日	4銭3厘	白糸	1本	7月31日	3銭	マツチ		7月23日	17銭	女出面
12月4日	30銭	小麥	5升(収入)	7月25日	13銭5厘	手拭	4筋	7月5日	7銭5厘	下帯
11月15日	1円65銭	白米	2斗	6月25日	60銭	白米	1俵	5月8日	31銭8厘	唐引
11月12日	3銭1厘	鯨尺	2俵(収入)	6月9日	6銭	鶏	1羽(収入)	5月7日	25銭	豚尻
10月11日	75銭	馬鈴薯	5升	6月25日	6銭5厘	編み笠	1斤	5月29日	5円	豚尻
9月9日	30銭	大豆	5升	6月9日	5銭	玉砂糖	1ハイ	4月28日	2円(外2円貸し)	去勢豚
6月25日	15銭	電信	半斤	6月9日	1銭	胡瓜	1ハイ	4月25日	80銭	戸長役場日当
6月20日	6銭3厘	砂糖	3人	5月3日	4銭	粟	1升	4月16日	1銭5厘	湯銭
5月22日	1円	佐官手間	50本	4月22日	31銭4厘	瓜子	22コ(収入)	3月15日	10銭	ニシン
4月22日	3円	リンゴ苗	大・小	4月18日	9銭	鎌	1丁	3月15日	35円	馬代金
4月4日	4円16銭	白米1俵	石狩口より	4月5日	10銭	ニシン	22本	3月14日	1円2銭	石油
4月2日	2円40銭	水晶印	1丁	3月21日	15銭	鉦	1丁	3月5日	5銭	酒
3月19日	8銭	ノミ	1丁	3月10日	39銭3厘	マサカリ	1斗	2月16日	20銭	青毛3才牡馬買入
3月11日	32銭	大磯より新橋迄汽車賃	5厘	3月9日	48銭	醤油	1斗	2月2日	10円	醬油
2月2日	1円11銭	静岡より熱田迄汽車賃	10銭1厘	2月21日	55銭	塩	1俵	1月23日	92銭	白米
								1月17日	3円77銭	中白砂糖
									13銭	1俵 余払フ

12月29日	12月25日	12月17日	12月9日	11月19日	10月30日	10月10日	10月7日	10月6日	9月8日	9月2日	8月29日	8月16日	7月27日	7月8日	6月10日	5月11日					
27銭	17銭	25銭	17銭	3銭	12銭	30銭	2円	20銭	30銭	2円40銭	50銭	13銭	55銭	8銭	25銭	30銭	62銭5厘				
塩	玉砂糖	神社資金	白米	半紙	サツマ芋	ハタハタ	百合玉	白花豆	青年会	リンゴ	坂田氏香代	坂田氏不幸に付	燕麦	トーキビ	神社費	ソバ種	除虫菊干花	雞卵	女出面	白米	
3升	1斤		1升	2	1	330	11	6升	100斤	100斤	2俵	100本	1斗	10ヶ	1人	5升					
							600匁	6升	100斤	100斤	2俵	100本	1斗	10ヶ	1人	5升					
							600匁	6升	100斤	100斤	2俵	100本	1斗	10ヶ	1人	5升					

果樹栽培の奨励

金子仲久

花畔村は明治四年若手団体が入植し開拓に従事したが、開墾跡に作付けされるものは主に雑穀類が主で日常生活に必要な食糧に重点を置き、収穫する迄長い年月を要する恒久的な果樹栽培に着目する者は居なかつた。

明治二十年同志と共に新潟県三島郡より花畔村に移住定着した金子清一郎は郷里三島郡で、六ヶ村の戸長をしていた行政治産の経験を基に養蚕・牧畜・果樹栽培等を取り入れ奨励した。今その中の果樹栽培趣意書、規約等当時の記録が残されていたので掲げて見る。

花畔共同果樹會設立趣意書

花畔村ハ石狩川沿岸ニシテ地積二千六百四拾餘町歩現在戸数三百有余戸ナリ、其位置ハ石狩港ニ接續シ地質細砂ニシテ穀菽野菜等ノ收穫ニ乏シト雖トモ却テ林檎梨葡萄等ノ培養ニ適宜シ佳良ノ果實ヲ産出スルハ信シテ疑ハザル処ナリ就中石狩川ニハ數十箇所ノ漁場アリテ以テ肥料ニ富ミ又村内中央ニハ運河アリ運輸ノ便利ナルコト他方ノ及フ所ニアラス。

夫レ林檎ハ八拾年ノ壽ヲ保ツト。今ヤ果樹栽培ノ業ヲ起シ務メテ果実ノ惡種ヲ排除シ而テ良種ヲ撰擇スルハ實ニ焦眉ノ急務ナリ是ニ於テ有志者協力良種ノ果樹ヲ培養シ漸々進歩一村ヨリ一郷ニ及シ進テハ物産ヲ増進シ以テ國家ノ經濟ヲ助ケ退テハ各自ノ幸福ヲ圖ル所以ナリ。

花畔共同果樹會規約

第一條 本會ハ花畔共同果樹會ト稱ス其創立事務所ヲ花畔村三拾八番地ニ置ク

第二條 本會ハ果樹栽培ノ發達進歩ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第三條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲メ資金二百餘円ニテ創業シ漸々進歩資金増加ノ上ハ株式會社ト爲スコトアルヘシ。何人ニ限ラス資金五円ヲ出ス者ヲ會員トナス。

資金ノ拂込ハ三月九月兩度ニ拂込事

第四條 本會ノ會務ヲ辨スル爲メ會員一同ノ投票ヲ以テ理事二名ヲ撰擧ス

理事ハ事業ノ擴張ニ從ヒ増員スル事

理事ハ任期五ヶ年トナシ滿期ノ上再撰スルコトヲ得

第五條 理事ハ本會ノ全体ヲ負擔シ將來ノ隆盛ヲ圖リ資金ノ多寡ニ應シ本會必要ノ運動ヲナス事

第六條 理事ハ各地ヨリ種類ノ善良確實ナル苗木ヲ購求シ又ハ地方便宜ノ箇所ニテ苗木ヲ仕立ル事ヲナス

第七條 理事ハ年々三月定期會ヲ開キ年度内運動ノ實際ヲ會員ニ報

告スル事

第八條 理事ハ名譽職ニシテ當分ノ内無給ナリ、旅費日當ヲ支給ス且ツ運動ノ実費ヲ贖フ事。但シ當分ノ内旅費五拾錢日當四拾錢ト定ム。

第九條 理事ハ事業手ヲ雇入レ之ガ運動ノ監督ヲナス事

第十條 本會ハ各地ニ於テ地方委員ヲ指名撰擧スル事

地方委員ハ會員五名若クハ拾名ヲ代表スル事
地方委員ハ理事者ノ行爲ヲ鑑査スルノ權ヲ有ス若シ理事者行爲ヲ過ルアラバ之ヲ忠告シ又ハ委員協議ノ上理事ヲ更撰スルコトアルベシ

地方委員ハ當分無報酬ノ事

第十一條 果樹実ヲ結ブノ后會員一同協議ノ上果実販賣利益配當ニ係ル一項ヲ更ニ約定スル事

第十二條 利益配當ハ出資金額ニ割合ヲナス事

第十三條 資金全額ヲ拂込マスシテ退會スル者ハ拂込タル資金滿十ヶ年ノ后ニアラザレバ之ヲ返却セス、既ニ拂込タル資金ト

雖トモ之ヲ利子又ハ利益ノ配當ヲ附セザル者トス、脱會ノ申込ミナキモ其期限内ニ資金ノ全部ヲ拂込マザル者ハ脱會者ト做ス

第十四條 果樹栽培ヲ左ノ三類ニ分ツ

第一項 會員ニシテ果木植込ニ適宜ノ地ヲ所有シ之ニ植込ヲ致シ度者ハ左ノ規約ヲ用フル事

一、苗木ハ土地ニ適宜ノ種類ヲ會ヨリ無代價ニテ貸与ス

- 二、植附ハ一ヶ所一種類トス
 - 三、資金五円ニ付林檎梨ハ百本、葡萄ハ二百本ヲ限トス
 - 四、苗木植附及栽培肥料等ハ總テ理事者ノ指揮ヲ受ルコト
 - 五、植附后枯死或ハ災害ノ爲メ不足ヲ生シタル時ハ其旨届出テ代リ木同種類ヲ植ルコト
 - 六、獸害或ハ虫害等總テ怠ヨリ出タル損害ハ地主ニ於テ贖フベキコト
 - 七、果木ノ枝刈込ハ會費ヲ以テ之ヲ行フ其他悉皆地主ノ負擔トス
 - 八、果実販賣等ハ會ノ受持ナリト雖トモ地主ノ都合ニ依リ自由タルコト
 - 九、果木成長シ実ヲ結フノ後、果実ノ二割則チ拾分ノ二ヲ會ニ納ムルコト
但シ二割ハ代金又ハ果実果木ヲ以テ定ムルコトモアルベシ
 - 十、植込ノ土地賣買讓與ノ節ハ會ノ承諾ヲ受ケ引受人ト更ニ約定ヲナスコト
- 第二項 土地ヲ借受ケ植附規約
- 一、借地料ハ會ヨリ仕拂フコト
 - 二、借地料ハ土地厚薄ニヨリ價格ヲ定メ永代ニ定約ヲナスコト、但シ初年ヨリ何程七年ヨリ十三年ヨリ何程ト定ム
 - 三、借地ハ運搬等便宜ノ土地ニシテ反別壹町五反歩以上トス
 - 四、果木ハ一ヶ所一種類トス
 - 五、植付費栽培肥料冬囲費等ハ五ヶ年間下リ小作者ノ受持トス

六、枝刈及毛虫取ハ會費ヲ以テ行フ事

七、六ヶ年目ヨリ栽培ヲ除クノ外悉皆會ノ受持トス

八、借受土地賣買讓與ノ節ハ會ノ承諾ヲ受ケ引受人ト更ニ約定ヲナスコト

第三項 土地ヲ買受ケ植込之事

一、買受土地ハ壹町五反歩以上トス

二、買受土地ハ運搬等便宜ノ箇所ヲ撰定スルコト

第十五條 前箇條ニ洩タル條項及ビ実業ニ照シ不完全ノ箇條ハ後日會議ノ上改正加除スル事

右之通り規約致シ候間會員一同茲ニ押印致シ候也

明治三十年

石狩郡花畔村

金子清一郎 ㊦

札幌 北五條西七丁目貳番地

大西長太郎 ㊦

鮭と鯿の昔話

福田 佐市

石狩は遠く慶長の昔から鮭によって栄え、今日まで歴史を重ねて来たところだ。明治期には、年間一四〇万尾以上の記録もあり、とにかく獲れて獲れて困った様だ。私の子供の頃（昭和の初め）は、明治の記録的な大豊漁には及ばないものの一〇万尾前後は獲っていたようです。その頃、石狩の鮭は主に今の手稲駅に運ばれていたようです。その道のりは、約一六キロ位だったと思います。石狩から花畔までは砂地で、花畔から手稲までは今で言う泥炭地層のところを道路が通っていたものですからヒドイ道路でした。

私の家は当時、樽川七線（今の樽川酪農記念館の所）にありました。その前も難所の一つで、雨の続いた後はひどくぬかる所でした。鮭の時期になり雨が降るときまっつて鮭を運ぶ、馬車や馬がはまっつて身動きが出来なくなりました。朝まだくす暗い時分に、馬車追いが「オイ頼む」と言っつて、馬をあげる手伝いを頼むため私の家に来たものでした。当時は、まだ馬全盛の時代で馬車、ダグラと言っつて馬の背中側の両側にカゴを下げ、その中に鮭を入れて運んでおりました。しかし、その様な時代も永くは続きませんでした。鮭が獲れたの

は昭和の前半までで、その後は、急激に獲れなくなつてしまいました。その原因は勿論、人が母なる川への愛着を忘れたことにあります。石狩川流域は延長一五〇キロと推定されますが、開発が進むにつれて石狩川に汚水は集中した。一時、鮭は絶望視されていた。しかし、最近では人々の川に対する認識もあらたまり、また、鮭をよみがえらせる努力も実り、今年には実に一九万尾を超える鮭の水揚げとなつた。本当に有難い事だと思つています。

次に、この鮭と全く対象的に既に「幻の魚」となつてしまった「鯿」にまつた話を紹介してみようと思つています。

私の青年時代、石狩湾は鯿の本場でもありました。毎日、新聞、ラジオで報道されるものは、何千石と言つた水揚げでした。すぐそこ石狩湾新港から樽川の浜でも、沢山獲れました。当時、私も含め樽川の若い人方は、春早い農閑期を利用して鯿の千石場所「銭函」へ、「モッコ」しよに行つたものです。「モッコ」しよと言つても、今の人にはピンと来ないでしょうが、前浜で獲れた鯿を箱形の背負子に入れて運ぶ作業です。銭函は地形の関係で獲れた鯿はみな、鉄道を越えて上の丘まで運ばなければなりません。銭函付近は、小樽に向つて少し登りになつていた。大勢の人が何度も線路を越えて鯿を運ぶため、モッコからしたたる鯿の油のため汽車がその坂を登れない事もよくありました。

その頃、樽川の浜には、鯿だけでなくフグやワタリガニが浜から10m位のところに、ウヨウヨ居りました。当時を知らない人は、そんな事は嘘だろうと思つてしまうが、実際そんな状態でした。当

時、フグは全々食べられないものと思って、全部捨てておりました。鯉のいなくなった原因については、海の汚れのことありましようが、学者の説に依ると海流や水温の変化によって北へ北へと住む場所を変えたためという。

しかし、もう一度、あの脂ののった鯉の味を味わってみたいと思うのは、私だけではないでしょう。

石狩平野の雁をめぐって

黒田晶子

石狩近辺の地図をひらくと、対雁、雁里、東雁来など、雁の字をあてた地名が目につきます。このあたりは、雁にゆかりのふかい土地なのでしょいか？

数年まえに石狩に移り住んだとき、私は夫から、親船町にある自宅のま上を通過した、水鳥の大集団の話をききました。昭和五十四年四月二十九日、快晴の正午ごろ、空にいたたくさんの穴からアリの群が出てくるように、頭上がくらくらくなるほどの数の鳥が、海から内陸にむかって飛んだ、というのです。版画家である夫は、へやで画を刷っていて、近所の人が「雁だ！ 雁だ！」と叫ぶ声をききながら、すぐにはとび出せず、刷りおわってから外へ出たのですが、

それでもまだ右にかいたような光景がつづいていたそうです。四月といえばちょうど水鳥の渡りの時期です。雁であったか、カモであったか、その混群であったか……以来、毎年四月になると、私の心はそぞろになり、幻の雁の大群に会いたくて、遠出するのは気が重く、夢にも雁の声を聞いたほどです。なにしろ空ゆく彼らと、地上の私たちがうまく出会えるのは、移ろう季節のなかの、ほんのひとときにすぎないのでから。

雁という鳥の、野性と気品をあわせもち、聡明で温かみのある、母性的な魅力に、初めて近ちかと接したのは、昭和五十七年の三月二十八日、ウトナイ湖でのことでした。その日私は、空に星のきらめく二時半に家を出発、途中、当別で星子廉顕さんと落ちあいました。美唄高校の先生で、永年にわたって雁を観察、撮影しておられる方です。ウトナイ湖の東側の田に着いたのが五時、あついお茶とカンパンの食事をしながら、待つこと一時間半、窓から耳だけ出していた星子さんが、突然、火花のように泣きました。「キタキタキタキタキタキタッ！」。車からとび出す二人。

雪の消えのこる田と、枯れいろの木立、西方の低い丘陵の上に、かすかなしみのようなかげが浮かんでいます。見つめるうちに、それは一列の羽ばたく影となって、こちらへむかってきます。あっちにも、こっちにも、数羽、数十羽……宙に浮かんだ横糸を、たてに小さくゆすぶりながら、羽ばたく群は、うろ覚えの歌の断片のように、つらなつては、乱れ、とぎれては、つながり、あるいはさおをなし、あるいはかぎにうつり、数羽の外れものをかかえのまま、風

を操るものの自在さで、やわらかな梯団をくみつつ、すばらしい速さで近づいてくるのです。「四百、五百……」数えきれないのに、数えつづける星子さん。パイプオルガンを切れ切れにきくような、深い響きのある声を、私たちの頭上に浴びせて、雁の主群はなんと、私たちが待ちうけていたまさにその場所に、降りたつたのです。

さ青の空を背景に、長い首をさし伸べ、ゆたかな胸を誇らかに朝陽にさらし、一羽ごとにことなる腹の縞もようもくつきりと。ま上の通過をあおいで、ふりかえると雁たちは、ひろげると一メートル半という幅広のつばさを大きく張って羽搏きをとめ、オレンジ色の脚をおろしながら高度を下げる所です。ひとしきり、田の面に叫喚がみちて、しずまり、雁たちは落ち穂をついばみはじめました。この日は車を走らせる先々で、稲田の刈り株と同じいろをした雁たちの姿をみました。主にマガンで、少数のヒシクイと合計して二千五百羽はいたと思います。宮城県伊豆沼、青森県八郎潟などで冬をすごしたあと、北上の途中、ウトナイ湖にしばらく立ち寄った雁が、日中は周辺の田に出て餌をとっているのです。鳥のいたあとへ行ってみると、直径七・八ミリの、円筒状の糞が落ちていました。これからシベリヤへかえって、繁殖期をむかえるのですから、たくさん栄養をつけておかなければなりません。ツンドラには、丈の短い草の芽や、土中の根はあっても、こんなに養分にとんだ穀物はなんでしょうから。

そのあと四月いっぱい、雁にあけくれました。星子さんから、「いま五十羽の群が、当別からお宅の方へ向かいました。五分くら

いで着くでしょう」と電話がかかってくると、二階の窓にはりついで、約束をしたわけでもない恋人を待つ気持……たいていは、あて外れです。それでも石狩川河口や、八幡町、家の近くの浜で、数羽から十数羽の小群には会いました。望来に住む友人からは、四月なかばの午後三時前後、二日にわたって、数百羽のマガンが、無煙浜から北東に向かった、という報告が入りました。望来といえば、昭和五十二、三年までは、沖の海上が石狩を通る雁のねぐらになっていたところ、今でも内陸と往復する群がよく見られます。また八幡町のフロンティア乗馬クラブでは、四月の八日ごろ、雁の大群が海の方へ向かった。あまりの美事さに、馬上の人々も思わず手綱をゆるめて、空をあおいだ、ということでした。何年かまえの月夜の晩には、外で浮かれ騒ぐ酔払いの声がある。出てみたら、正体は雁だった、とは馬場のご主人の話です。

私たちの住んでいる石狩は、たしかに雁をふくむ水鳥の渡りの主コースにあたっています。江別市在住で、現在日本猟友会副会長をしておられる泉重陽さんは、子供のころ、毎年四月二十日前後になると、きまつて、雲のような大群をなす雁が、美原、一原に降りたつものを見たものでした。そのころ江別一帯は、まだ一大湿原地帯でした。対雁一帯にたくさん雁が見られなくなったのも、そんなに古いことではありません。また、当別の北、当別川ぞいの青山も、むかし雁獵の名所であったと聞きます。

石狩川という大河と、河口の砂洲、日本海へ開いた石狩湾、北海道屈指の大湿原地帯をかかえた石狩平野。それがシベリヤから日本

列島を南下する鳥たちの、絶好の通路となってきたのは、ごく自然のことと思われず。

長い距離をとぶ渡りどりは、ただ漫然と、北へ、南へとむかうわけではなくて、かなり精確なコースをとることが、だんだんと明らかになって来ています。ヨーロッパのナイチンゲールは、毎と同じ村の同じしげみへもどってくるものと信じられてきましたし、私の家のうらの小さな柏の木立に、毎春巣をかけるアカモズも、秋に去っていった鳥、あるいはそのライバルがかえってくるのではないかと思えます。数多い渡り鳥のなかには、ムナグロのように、その年生まれ若鳥だけの集団が、成長とは別のコースをとって、結局成鳥と同じ目的地まで飛ぶ、というような、驚くべき本能をもった種もあって、私たちの好奇心をそそりますが、その謎は、たとえ謎のままであっても充分にたのしいものです。それが氷河時代からの古い記憶にみちびかれるものなのか。食糧と、より生活しやすい環境を求めての移動なのか？

いずれにしても、日本で越冬したマガンが、シベリヤのふるさとへ帰るまえに、最後に大結集する場所が、石狩の北にあります。篠津原野と美唄原野の水田です。美唄の宮島沼には、渡去直前で五、六千から一万羽に近いマガンが集まりますが、こんなに多数のマガンが一ヶ所で見られる場所は、日本中ほかにありません。

雁はここで最後の落ち穂ひろいをしたあと、五月の連休あけ、田が耕運機のうちなりと人影でにぎわいだすのとすれちがいに、飛びたつてゆきます。五月六日、私は宮島沼に彼らの旅立ちを見送りにゆ

きました。天気は朝からおだやかな高曇り、沼の対岸の山の雪も大かたとけて、耳にはヒバリ、キジバト、オオジュリン、カワラヒワ、トビの声が入ってきます。近くの木にかけられた大きな巣からは、卵を抱いているらしいカラスの殊勝そうな頭がのぞいています。湖面の雁は、すでに大半が渡ったあとで、残りの三千羽ほどが密集して、全員一つの方向にむかい、羽をバタつかせたり、大声で呼びあつたり、いかにも落ちつかない様子です。風は東南、北へ飛ぶのに、ななめ後方から押される計算です。先はながいのだから、はやく出発すればよいのに、という私の心配をよそに、鳥たちはだんだん風の出たきた昼をすぎても、まだのんびりしています。同行の駒井秀子さんと、「リーダーは優柔不断のハムレット型か？」などどやきもきしているうち、二時二〇分になって、一斉に舞い上りました。

飛びたつときは、寄り集った群から、あい前後してパラパラと脱け出してゆくのですが、なにしろ多数なので、しばらくは水と空の境に、はばたく翼の厚い層ができます。まるで光の碎片が限りなく散乱しつづけているかのような、夢幻的な空間、そして鳥たちの叫喚。それが一ど空へ抜がって、湖上をめぐり、五百羽ほどがそのまま北へ向かいました。のこりは、仕切りおくれた感じで水上へもどります。そのときの、着水まえの一さわぎ——鳥は翼をひろげたまま、左、右に激しく身体をひねり、きりもみ、宙返り……つむじ風のなかの落葉のようにとびかうのです。そうやって急速に空気を逃がして降下するわけですが、それがまるで再会をうれしがって

いるみたいなのです。——「さつき別れたばかりなのに」と駒井さんが笑っています。十分後に、群は一斉に飛びたち、こんどは決然として千羽が北の低い丘陵のはさまを、遠ざかってゆきました。このあとはおそらく、石狩川ぞいに一気に北海道上空を飛びきつてしまふのでしょうか。宮島沼以北からの、雁のたよりは絶えてありません。

水鳥のわたりは、体内に脂肪をたくわえると、それがもつあいだは、いきに長い距離をゆくことが多いようです。メキシコ湾を横断するハチドリの種類などは、体重がたった四グラムの鳥ですが、体内に二グラムつまり一円玉二個分の脂肪を貯えただけで、八〇〇キロという距離をノンストップで飛んでしまふそうです。飛ぶというのが、いかにも大へんなことに思えるのは、いつも地上にしばらくつけられていた人間だけの感覚なのかもしれません。「ニールスのふしぎな旅」^{*}のなかで、あの皆から尊敬をあつめていた隊長アツカが、仲間と言っているではありませんか。

「教えてやんなさい、早く飛ぶほうが、ゆっくり飛ぶより楽だつて！」

それにしても、春にはこれほどの数で集まるマガンも、秋にはほんの少数しかこの一帯に降りません。それはどういうわけでしょう？ またウトナイ湖にいた、マガン以外の雁は、どこへ行くのでしょうか？ それについては、またこれから調べ、ご紹介してゆきたいと思います。

つけ加えておきますが、日本でみられる雁のなかまは、ふつうは

マガンか、ヒシクイです。ほかに、シジュウカラガン、ハイイロガン、ハクガンなども発見されています。数千羽のなかに一羽か二羽という、これらの珍鳥は、私たちの心をときめかすばかりではなく、群の移動ルートを知るうえでよい目印になります。ハクガンは、去年、今年と二年つづけて、伊豆沼、八郎潟、ウトナイ、美唄の水田で見られました。

石狩の風のなかを飛び、北の海をわたっていった雁は、シベリヤのどの辺に降りたつて、ツンドラの浅い緑の上に皿状の巣をしつらえ、卵をあたたためるのか、ハドスンが、賢くて気品のあるこの鳥を食べるくらいなら、いっそ若くてよく肥った人間の肉を食べた方がまだましだ、と言った雁[＊]たちが、どんなに控えめではつらつとした愛のしぐさや声で、北方の春を活気づけるのか。私はいつかきつとのぞきに行つてみたい、と希っています。けれども、それよりもっと切実に希うのは、今、石狩平野に、太古からつづく旅のみちの、小さな休憩地をみいだしている鳥たちが、これ以上数を減らすことのないように、ということなのです。

雁のすばらしさを私に教えて下さり、自らも雁の風貌を備えておられる（失礼！）星子先生、ならびに、お忙しいなかインタビューにおこたえ下さった泉氏への感謝と、以後、雁やその他の鳥に関し、何かかわつたことがありますらお知らせいたたくよう、皆様へのおねがいを記して、ペンを置きます。

（註）*1 「ニールスのふしぎな旅」 岩波少年文庫 矢崎源九郎訳

*2 「鳥たちをめぐる冒険」 講談社 黒田晶子訳

生振古老物語―III

前川道寛

①七線地藏堂

生振村南二号（茨戸ゴルフ場に行く道）を七線から北に向って少し進むと高台になる。そこに、七線地藏堂が建っている。

平素静かなところだが、年一回七月二四日には幟が立ち附近の子供さんを中心に、家族ぐるみで部落の人達が集まってお祭りをする。時には子供相撲などもあって、仲々盛大である。

地藏さまは赤頭巾に白い前垂れ、いかにも庶民に愛されるお姿である。昔は山の中腹に地藏さまだけが建っていたが、今から十年ほど前、土地の所有者伊藤幸蔵さんが山を売った時、御堂を自分で寄附して今の位置に建てられたという。

お地藏さまは人々のさまさまな願いと結びついて親しまれ人口過疎の中にあっても、札幌方面に出た人達も集まって来ている。

このお地藏さまが、いつ頃からあるかと言う事を知っている人はいない。それが今から二〇年程前、昭和四二年七月、地藏堂まつりの帰途、偶然にも附近に住んで居られる長谷川六兵衛さん（嗣氏尊父、故人、当時九〇才）にお会いして、お地藏さまの由来を聞くこ

とが出来た。

「その源は明治二八年に遡ります。今の篠路龍雲寺（石狩調役荒井金助の墓がある由緒ある寺）のお坊さんが山上に地藏堂を建てこの場所一帯の無償下附を願いだしたところ、国の制度の変更から不許可となり、そのお坊さんはお地藏さまを置いて篠路に立ち去られた。」と語って下さった。

その後、長谷川さんの話に出た龍雲寺を訪ねて、御住職（今の先代）に会いこのことについてお尋ねしたところ、「この寺の二代目住職は大変活動的な方であり、生振地区にも一カ寺建立の計画をたて、土地の有力者吉沢さん達と募金をした記録が残されていたのを見たことがあります。この計画は何かの都合で実現しなかったようですが、その地藏さまはその時のことと関係があるようです。その記録は暇な時探してみましよう。」と言われたが、その後、会う機会もないまま亡くなられてしまった。

このお二人の話からみて、お地藏さまの由来は、明治後期、篠路龍雲寺にかかわるものと考えてほぼ間違いないものと思われる。現在、ここの管理は、吉野重一さん夫婦が行なっている。

②下段の地神さま

茨戸観音橋を渡って北に2km、道々にそって進むと南二号線がある。右に廻れば茨戸ゴルフ場、左に廻るとすぐに「天照皇太神宮」と書いた五角柱の石塔が建っている。この石塔のことを生振の人たちは「下段の地神さま」と呼んでいる。

「下段」とは「上段」に対しての言葉であるが、「下段」という言葉がいつ頃から使われるようになったのかははっきりしない。しかし、石狩川上流の開拓が進み、生振の人々が水害におびえるようになってから使われるようになった言葉だと思われる。

「生振」は、地形的には紅葉山砂丘の延長線上にある。また、南部には、石狩川の旧河道の低地がある。つまり、砂丘の高地が上段で低地が下段となる。石狩川に囲まれている「生振」は、一年のうち春秋二回の洪水が通例となっていた。その度、低地は水がつき、高地は安全地帯となっていた。それで人々は水のつく方を何時しか「下段」と呼ぶようになったのだろう。

今回とりあげた「下段の地神さま」も洪水の頻発した時代には、水のつかない上段の方であったが、新川が掘られ水害がなくなつてから現在の場所に移された。この地神さまの由来については、菅原三郎さん（明治四一年生れ）からお伺いした。

「下段と称する所には、開拓時代四国阿波から来た人達が多かつた。この地神さまは、この人達（阿波衆）によって、最初、上段の農業倉庫の所（当時の伏籠別神社境内の一角）に建てられた。建てられた年代については、はっきりしないが明治中期から後期にかけての頃と思われる。御神体は、「天照皇太神宮」と書かれた五角柱の軟石で、初めは阿波衆と呼ばれる人達だけでお祭りがされていた。お祭りは、春と秋の二回、地元の農家で神主さんの代行をされる大島さんとか柴山徳次郎さんとかを招いてお祭りをしていた。神に祈ることによって災害から畠作物を護つて貰うことが主体であった。害

虫に悩まされた農民は、繩に吊り上げられた護幣を貰つて虫除けとした。初めは阿波衆だけだったが、そのうち水害のため他の土地へ移る人も出たため、他国の出身者にも参加してもらうようになった。今では部落的な祭りとなっていて、あまり祈禱的な事はせず皆でお参りして、お酒を振舞つて専ら親睦的行事となっております。」（ここにも時代の移り変りを感じる。

（注） 町内の地神さまの分布は、生振だけでなく本町地区を除いて、ほぼ全町に分布している。地神宮の祭礼は、菅原さんの話にもあるとおり春秋二回「社日」を選んで行なわれる。小林己智次の「農民信仰の実証的研究」（小林一九三八）によれば、「社日」は立春及び立秋後の第五の成の日とされ、和漢三才図會には「春、秋二分の前後近き成の日を社日となし、農家を祝す。燕は春社に来り、秋社に去る。」と書かれている。また、社は元来「クニツカミ。土地の神」という意味だそうである。

北海道に於ける地神宮の起源については、四国地方、とくに香川県出身の移民によって広められたことが知られている。地神宮の形態については、木柱、自然石、石塔形のものがある。町内の地神宮については、まだ調査が行きとどいていないが、ほとんどが軟石を使った五角柱の石塔形のものが多いようである。

（石橋記）

南線地区(現花川北)の昔と今

—阿部重利さんに聞く—

駒井秀子

今回は、北五条に住んでおられる阿部重利さんにお話を伺い、その個人史を通して、この花川北地区の変遷を尋ねてみることにした。私達新住民が押し寄せる前のこの地区は、酪農水田混営による米とデントコーンと牛乳の村だったという。どのような時代の波に浚われて、農夫も牛も消えてしまったのか、そこが知りたいと思った。

《生まれたころ》

「明治四〇年ですからもう大分の年です。小学校の仲間が四、五人になりました。同級生ですか。わたしらヒツジの年で、ここで一番多かったが十四、五人位だったですよ。」

この花川地区は、花畔市街地の開村に遅れること八年、明治十二年に四国から入った十四人の人々によって開かれた。阿部さんの祖父豊藏さんもこの時の一人だったらしく、今もこの地には阿部姓の人が多い。

入殖初代の苦勞は言うまでもないが、明治二六年には「花畔村々民契約」が設けられて、村内は五組(上、中、屯田新道、下、軽川新道)に分けられているので、その頃にはやや生活にも見通しが立ちかけ

ていたらしい。しかし土壤は概ね砂土、肥沃とは言えず、当初開拓は進まなかったようである。その収獲物は主に大麦、蕎麦、粟、稗、大豆で、かつかつ自家用にも満たず、男は漁場の出面で日銭を稼ぎ、女も手打そばや野花を売ってくらしを立てた。一時養蚕業を行う者もあったが、これも数年で消滅している。米は、作れる状態ではなかった。

やつと明治三〇年代に入ると畑作も安定し小麦、大麦、裸麦、燕麦、大小豆、ゴールデンメロン、りんご等が穫れ、石狩浜で海産物と交換するだけでなく、換金もした。大麦は札幌麦酒株式会社と特約し大体一石六円以上で売り、りんごは花畔市街地で売ったという。馬も蓄役用としてどの家でも飼うようになり、人間の労役を軽くした。また入殖当時は薪材を盛んに出していたようであるが、たちまち自然林も伐り尽くされて、当時は風防のために伐林は厳しく禁じられていた。前記した「契約」の第一章に禁伐林がうたわれている。「本村ハ海浜ニ接近シ海風常ニ荒キヲ以テ農作物ニ及ボス害甚シ、故ニ禁伐林ノ設ケアリ」

この契約は村民相互に厳しく監守し合ったものであるが「看過スルトキハ同犯」と見做され、違反する者に対する制裁も明記された。仲々簡単にはいかなかったたのである。

《子どものころ》

「その頃の農家の子どもはよく働きました。小学校も高学年になると五時には起きて、家の仕事は山ほどありましたよ。まず牛舎で糞を集めそれをフォークで堆肥場まで運んだ。重労働でしたね。」

それから乳搾り。二〇頭ほどいましたね。畑も十三町歩ほどありましたが人手はいくらあっても足らんほどでした。親は「これだけせなかつたら学校行っちゃいかん」と言うし、先生も「家の仕事をしてからこい」と言いましたから、それが当り前だと思つとつたんですね。男五人の長男でしたし、特にそうであつたかわかりません。」

この地区酪農の草分は横井虎造という人で、明治三十三年三月に札幌の賀川肉屋からエーヤー種二頭を買入れ一日八升を搾乳し、一升八厘位で売って歩いたという。以後、南線地区より樽川村に至る間に牛飼は多くなり、畑作酪農混営が堅実な農家のあり様となつたのである。それに伴つて授精事業を起す人も現われ、明治三九年宮野石松という人が南線樽川の酪農家を回り種つけをして歩いた。この人の妻は大正一三年、牝牛に突かれて死亡し最初の犠牲者となつた。

「しかし牛の世話はえらかつたなあ。あのエサにするデントコーンを手押しで切るんだが、水気があるから冬にはがんになつてねえ。冬といえば学校でもまず勉強前に雪かきでした。廊下も教室も雪がどかつとね、それから凍れてしまつた弁当をストロブの上から吊した四角い網のかごに並べて、薪ストロブをたいて、それでやつと勉強です。」

石狩小学校の創立百年記念誌から、阿部さんと同世代の人達の思い出を拾ってみると、やはり勉強前の雪出しのこと、網でなければ椅子をストロブのぐらりに並べて弁当箱を置いたこと、また靴が凍

れても乾かすこともなかつた等々、今日の子供達の様子からは想像もできないくらいしぶりが浮かび上ってくる。

「遊びですか。学校にいる時以外は大抵仕事をしてましたし、夜は夕ごはんのあと三〇分もしたら寝ましたしねえ。」

前記の記念誌によると、兵隊ごっこやパッチ、駒まわし、冬にはスキー、スケートもしたとあるから、阿部さんもこのうちのいくつかはしたかもしれない。

「履きものですか。はじめはワラ靴でした。大人はツマゴ、あのケリも履きました。蛙の皮を干して、アイヌ人から教わつたもんでしようが糸で縫つて、母親が作ってくれましたよ。水も弾くしいいもんでしたが、そのうちズック靴が出てこの方が見かけが新しかったものですから大分履きましたね。しかしこれはすぐ濡れて、学校へ着く頃にはざぶざぶでした。いくらストロブで乾かしてもためでしたから、往きも帰りもざぶざぶですよ。よくあれで凍傷にもならなかつたもんだなあ。そのあとがゴム靴です。あのゴム靴も弱くて一冬もつなないう仕掛じゃあなかつたですね。まず二、三ヶ月のものでした。材料が弱かつたものでしょうか。」

「花畔の百年」に「世界大戦の好景気で、豆成金、でんぶん成金が生まれ、わらじからゴムの短靴に変わった。当時でんぶん成金で買ったゴム靴のことをでんぶんぐつと言つた」とあるので、阿部さんのゴム靴も大戦（一九一四〜一九一八へ大正三〜七）阿部さんは十歳前後）のころの思い出かもしれない。この戦争では、日本はほんのちよつと参戦して莫大な利権を手に入れた上、殆ど無限に出来

た世界市場をめざして諸産業は嵐のように発展した。工場の数だけでも終戦時、開戦前の倍以上になっている。世界の動向は阿部少年のゴム靴にまで波及していたようである。はき物だけでなくこの頃は、生活が年を追って便利になった。大正五年には石狩茨戸間に石油発動機船が運行した。大正九年、花畔市街地に電灯がつき、花畔石狩間を自動車走った。大正十二年には茨戸丸を新造して一日二往復旅客と貨物の運送をはじめ、同年馬鉄はガソリン車で引くことになった。そうして大正一五年には、ラジオが入ってきている。

《米つくり》

阿部さんのお話にはまだ米が出てこない。石狩の米つくりは昭和四年からで、南線地区でも入殖以来五〇年を経過していた。品種改良に試作をくり返し、水の確保に私財を投じた多くの人達の執念によって、はじめて成功したことである。昭和三年北十線揚水組合が誕生しその翌秋のこと、七十六町歩の水田は黄金の穂波に埋まったのである。どんなにか深い喜びであったろう。以来ここは花畔米の産地として一三〇〇町歩の水田を作るまでになった。品種としては坊主、栄光富国石毛、照錦ひめほるみなどの名が残っている。

農民の米作への執着は当然のことではあったが、主食として優れていることの他に右のような理由が考えられる。・排水不良地には畑作より水田がよい。・家用に貯蔵できる。・移住前に米作の経験がある。・寒さをしのぐ自家用酒がつくれる。・わら、縄、わらじ、むしろ等の自給ができる。・米ヌカは漬物に稲わらは馬の飼料になる。・畑作ものより換金に有利である。なんとしても米を作ろう

としたのもこれだけの魅力があったからだろう。

《助け合い》

「あの時分はなんといっても不便な時代でしたから皆助け合いましたよ。人の生き死にも農作業にも隣り近所の付き合いは大事でした。高等科を出た頃だったか部落会があつて納税実行組合っていいましたが、組合費が払えない人がいるとたてかえて、よくめんどろ見合いました。

たしかに互助精神は今より一般に浸透してもいたろうが、厳しい生活に立ち向かっていた時代の人々にとって、互いに助け合うことは社会的な必要事であった。

花畔村民契約は七条に及ぶが、「村民の一致共和」を村の発展上最も必要なこととして第一章にうたい、非常の災害疾病等に遭遇する者がいれば、その救助は村民としての義務であった。また「村内道路修繕等ノアルトキハ洩レナク出役スヘキコト」の一節は、道譜請もまた自分達で行うしかなかった事情を伝えている。そうしてこれらの契約に違反する者がいれば、「村民一統絶対的ニ交際ヲ為サザルコト」という、制裁措置を設けて互いに監守し合つたのである。助け合うためには身勝手は許されなかった。

年表を見ると昭和二年に、紅葉山水利組合設立とあるので、阿部さんのおっしゃる組合とはこのことかもしれない。更にこれが発展解消したらしい花畔土功組合が昭和五年にできているし、この互助組織が、戦後の農協に引き継がれてゆくのである。

阿部さんは農協の役員を一七年も務めた。また昭和二三年に南線

地区造田計画推進委員会が発足するとその当初から委員になり、昭和三八年からは理事長の重責を担い、解散に伴う困難な処理にも最後まで誠意を尽くした。

「そうですね、若いうちから外へ出とりました。まアこれでご奉公はしたんでしようなあ。ほんとうの名誉職というアレで、ぼくらたやすく言ったらええふりこいとるから、まアそんなことばかりしてるんで、その分家の仕事は年寄りと家内にまかせきりでした。家内には苦勞かけました。社会へのご奉公をするのに家庭を犠牲にしたらいかんということだなあ。」

他人の世話を、義務からでなく長い間するには、とても「ええふり」だけではもたないと思われるが、あるいは苦勞をかけた奥さんに対する反省の弁であつたかもしれない。

《結婚》

阿部さんの奥さんは、末の娘さんが小学校五年生の時四〇歳の若さで亡くなってしまった。二二年も前のことである。ある朝、「目まいがする」、「眼の光が暗くなる」と言つて、それきりだつたといふ。病名は心臓弁膜症であつた。

「昔の家内というものは嫁に行くのを死にゆくつて言うですよ。だからその家に身を失うまで尽くして、なんぼ切なくても生まれ家へ帰るなんてことはできなかったものです。わたしの家内もやっぱり切ない思いをしたものでしょうが、そういう時代でしたからひとつも愚痴は言いませんでした。」

奥さんのことを語るとき、阿部さんは痛ましそうな表情をした。

そういう時代だつたし誰もがそうだつたと言いながら、心を残して逝つたであろう奥さんを、辛かつたろう切なかつたろうと思ひやつているのだなあと私には感じられる。

今回のことで参考にした六冊ほどの記念誌には、女の人が全く語られていない。男たちは夢を見計画をたて、家業そつちのけで奔走した。家ではむずかしげに口を結び女房には何ひとつ語らず、外ではその分酒を飲んで大いに論じ、いつでも生活上のわずらわしい現実から自由になれた。女はその間一休何をしていたか。黙々と牛の糞を運び、デントコーンを切り畑をおこし種を蒔き、家内の雑用にくる日もくる日も心を粹き、舅姑に仕えていた。果して北海道百年の歴史は男だけが作つたのではあり得ない。生活の一番根っこを支えてきた女の側からも書き加えていって、はじめてこの民衆史も完成するはずである。そうでなくては、どこか味気ないしつまらない。男と女の間にわけもなく醸成されてしまつた憎しみのような差別意識を、とり払つてゆかなくてはならないと思ふ。

《病氣、お産》

「病院というのがなかつたので困つたものです。石狩に鈴木シンゾウというお医者があつたが、お医者を迎えにゆくには馬二頭用意しておかなかつたらだめでしたよ。二里の道往きだけで一頭疲れてしまつてき。湯タンポ入れて毛布でくるんで送り迎えしましたよ。めつたなことではお医者にかかることはできませんでしたが、四歳の子供をジフテリで亡くした時は、みすみす殺したようなんんだと悔が残りましたね。なんの病氣かわからないうちに死

んで、死んだ子をわたしと家内とで抱いて鈴木医院へ行きました。冬でしたが、ジフテリアだとわかって火葬に付きなけりゃあいけない。それまでは全部土葬でしたから火葬場がありません。墓地に鉄板をしいて薪を積んで火葬にしました。

ええみんな土葬でした。村の人が手伝ってくれて穴を掘ったです。あれで一丈位の穴を掘りましたねえ。火葬が一般になったのは母親が死んだ時からでした。そのあとで墓を作って納めようと思っただんですが、どこに埋めたかわからなくなってましてね。今でもあの辺りには土葬の時分のお骨がいっぱい埋まっていますよ。

病気の次に困ったのはお産でした。手稲に、あのころはガルガワ（軽川）といってましたが高橋さんという非常に腕のいい産婆さんがいて、その人を迎えに行ったのです。今の人は寝てお産をするので乳がでないと聞いたことがあるが、わたしらの頃は坐産でした。お産に使った水は縁の下に捨てなけりゃいけないとか、わたしの親たちはかたく守ってましたから、家内はあれでやっばり苦労であつたでしょう。しかし乳は余って捨てたほどでした。」
現在のような仰臥位分娩が一般的になったのは大正初期のころと思われるが、北海道の場合はかなり遅れていたようである。新天地とか解放的とか言われているが、移住前の母村の習俗が改良されることなくいつまでも守られていたという面もあつたのである。

《戦争》

「今度の戦争ですか、私は樽川集乳所に奉職しとりました。十二年間、終戦のどさくさまで居りましたか。応召した場合残された

家族のことを考えて給料生活者になっておこうと思つてね。結局応召はありませんでしたね。覚悟しとつたですが。あのカゼインをね、飛行機の燃料ですが、あれを牛乳から採る仕事もやってましたから統制品ということで応召しなかったのかもしれないね。

戦争というのは、もう欲も得もなくいやでしたね。石狩には白い海浜ホテルがあつてそれが目印になってやられたんですよ。農家も低空にやられて牛がずい分殺されましたよ。戦争も終りころになると、しょつ中敵機がやってくるんだが日本のは一機も来ない。不思議に思いましたね。あれで先の見通しなんかどれ位あつてやったことだか。警防団の指導で、わたしらも石狩浜で竹槍の訓練をしましたけれど、あんな幼稚なことだと思つてたものでしょうか。本気で、うぬぼれたことなんだなあ。勝つていたら今ごろ大変だなあ。軍がはびこつてしまつて、ひどいめにあうよ。」

《戦後》

長い戦争で荒れ果てた農地は仲々地力を回復せず、酪農地帯にとつて欠くことのできない飼料作物はハリガネ虫にやられ、復員による労働力は増えても生産量は落ちこむ一方だった。折からの非常な食糧不足は日本全土で目をおおつた惨状を呈していたけれどかつての米処も時代の期待に応えるすべもなくその対策に苦慮していた。

そこで昭和二三年、計画面積二五一町歩、揚水機電動機二〇〇馬力、水深七〇cm、水路延長二四〇〇米、組員約八〇名を以て造田事業に着手し、一年余りの後かん排事業が竣功したのであつた。その時の喜びを記念誌の中で杉中茂さんは次のように書いています。

「一ヶ年と数カ月を費やして、資材と資金難を乗り越えて二四年六月八日揚水機がうなりをあげて始動し、灌漑溝に満々と用水が堪えられた時、関係者全員、感激に涙したものでした」

二三年の着手は町内全域にわたった造田事業実施のさきがけであったが、水路に水のたたえられた年は、移植直播とも時期が遅れたにもかかわらず、天候にも恵まれ、造田面積八六町歩約四〇〇〇キロの新田米を収穫することができた。

以後この南線地区は二〇年の間水田による米と燕麦、デントコーンと牛乳の村として営農してきたのであるが、そうした酪農水田混営の村はその二〇年後に、今度は大都市札幌のベッドタウンとして道内最大規模の団地へと一大転換することになったのである。

《変貌》

「そりゃあ淋しいですよ。自然を相手にやっていた生活を一八〇度転換させることの淋しさは当然のことですよ。そうはいっても大勢には沿わないけませんし、相当苦しかったですよ。若葉小学校の敷地が私の住宅でした。建って二、三年の間はここいらは家も少なくて見晴しがききましたから、よく懐かしくて眺めたものです。風防林の木はこうであつたなあとか。そういうえば、生協のむこうの、ひとつも木のない高い所があるでしょう。あそこが、水路があつたところですよ。もとのようにしなくちやいかんというので、みんなして土地を平しましたけど、あそこが水路のあとですよ。」

住宅供給公社との間に南線地区都市化の話がでたのは昭和四四年

のことである。阿部さんは早速「南線地区都市化発展期成会」を発足させ、都市化のすみやかな完了のために尽力することとなった。

「割合順調にいきましたね。公社との間に何度も話が持たれました。町側として田中實さんに骨折ってもらいましたが、ちよつと他とは違った協力体制があつたということですね。しかし農地を手放すにあつては、断腸の思いがあつたでしょう。親が生きているうちは、親の気持を考えなくちやいからですから。そうですね、順調にいったにはいくつか原因がありますね。

地区の南半分はすでに三四年、内外緑地に割譲しておりましたがその新札幌団地の発展を目近に見て刺激を受けたこと、いつまでも、こんなこととして水田作っていたってばかくさいというような根生もあつたかもわかりません。

それと昭和四四年に、米の生産調整制度が施されたこともあつたでしょう。一生懸命作つた米も過剰米として積まれるようではどうもなりません。

それともうひとつの時代の流れとして後継者の問題がありました。私の教育のしかたが悪かつたんでしようが、農家をせなければ、親のあとをつがなければいけないという意欲を持たせる教育をしなかつたということなのでしょう。」

後継ぎの話になると阿部さんは笑つた。そうはいっても時代の流れに抗して子供を育てることが可能だつたらうか。気がついてみれば思いもかけない方向にそれぞれの子供達は行つてしまい、転換期に立つた世代は、その親世代ともその子供の世代とも違った苦勞を

経験することになったようである。

こうして昭和四六年二月二八日譲渡は完了した。翌四七年五月阿部さん達は、石狩花畔土地改良区南線地区の解散と、都市化期成会の解散の式を挙行し、次のように式辞を読み上げた。

「私共は生を現世に享け祖先より受け継いだ農業を経営し、農業以外の経験がなく之を守り続けることを天職として来、最近迄は本当に平和な、そして長閑な生活に満足しつつ来た訳であります。時代の急テンポな推移に従い、一大転換をしようとして居ります」

《ミミズを育てて》

「いやあそれこそお庭のような畑ですから」と笑いながら阿部さんは、今も毎朝畑仕事をしていると話してくれた。三時には畑にでて一日分を朝飯前に終らせてしまおうという。昔に比べたらままごとのようなものであるけれども、農業にも化学肥料にも無関心で、ひたすら有機農法を守り続けている。

「しかし反五俵、ていっばいとれて一反(三〇〇坪)五俵が常識であったのが、今であつたら一二俵はとれるんですから、農業は使わないかんのでしょうか。覚えとりますがはじめの頃あれで、カエルやドジョー、小魚が腹を引っくり返して浮いて、そういうことはあつたねえ。私のところは推肥ばかりだからミミズが大したものです。ミミズというのはいい肥しになるんですよ。そういうえび子供がみんな健康に育つたなあ。今のこういうものばかり食べると寿命がちちこまるんだ。昔は粗食でも力になったというところだが、今の食生活は、なんでもあるかわりには、むさぼって

たら、これは早く死ぬよ。

母親がよく作ってくれたものに、人参を豆腐で和えた「しらあえ」というのがありまして、つい懐かしいものだから今でも作るんだが母親が作ってくれたほどにはうまくない。舌がぜいたくになったものだからどういいうわけだかねえ。豆腐もその時分は作ったものです。特にお正月のために、一杯作りました。一二月に入ると取りかかるんですが、まず、石臼で台をこしらえて、二斗樽を置いて、台の上にひき臼を置いて、一晚漬けた大豆をすりつぶして樽に落とす。次に大鍋に入れてニガリを入れ四角い箱に流し入れるんですよ。箱には小さな穴があいてて中には木綿布を敷いてました。作つたその晩小さく切つて板に並べ、外へ一晚出しておくと「しみどうふ」のでき上りです。ニガリは塩をカマスに一杯買つてきて下に樽を置いて採つたもんです。そうですええ、まあ手もかかったがその分、おいしかったかもわからんね。今は簡単に買えるけれど、大豆の匂いもせんからなあ、これが、世の中どうなつとるのかと思うこともあるですよ。」

私は「文化」という言葉を思う。私達の食生活は子供達に伝える値打ちをもっているだろうか。

阿部重利さんは父親も南線地区で生まれた入殖二代めの農家の長男である。母村は徳島県の阿波、阿部さんの言葉には、ご本人も不思議がるほど母村の方言が染みこんでいる。そのどこか懐かしい気持ちにさせられる言い方で、阿部さんは農業化学肥料一辺倒の農業の行方を心配している。先人達の知恵の所産をきれいさっぱり捨てて

しまつて、かわりに新しく本当に安心できる方法があるわけでもないのに、自分のからだで実験しながら生きてるような危うい私達の文化を、はらはらしながら見守っているように思われた。

ほんとうに私達は、文化が一端断絶されてしまったところから出発してゐるような気がする。途切れてしまったことごとくを、その方がよければまた埋められるように、用意だけはしておきたいと思ひながら、阿部さんが手渡してくれた力強い太い編みかけの綱を、どうやって子供らにつないでゆこうかと思ふのである。

× × ×

今年も、すっかり冬になつた一日石狩の浜を友人と歩いた。もう根雪に覆われた海沿いの砂丘を、銭函の方へと歩いてみた。途中、波際まで下りてみると、粒砂のような風のつぶてが右半分を襲つてきて、露出している頬やあごの辺りが、じき感覚を失う。そうすると身も心もすっかり潔くなつて心底から自由な気分になるのだ。聞こえるもの音といえは縦横無尽にかけめぐる風と雪、見えるものといえはみずみずしい太古始原の空間のみ。

砂丘に戻つて更に行く、目の下面に柏木の群聚を発見する。その幹は短かく太く切り立っていて、まんべんなく張りめぐらした枝はあらゆるモノの侵入を許さない。林の奥はあくまで深く、更に地球の芯部にむかつて穿たれた巨大な穴のように思われる。おごりかな誘惑を隠して柏林はここを守る。そうして永劫の時空を一直線に駆け抜けてきた。

ここに居ると、私もまた、時をヒトの始原にむかつて走つてゆけ

そんな気がする。私につながる幾世代もの女たちを思い男たちを思い、私の有限の時間はこのとき、悠久の素形に感応して、ひととき、いのちはすみずみまでのびやかに広がるのだ。かくて石狩の野は、歳々に私を惹きつけて放さない。この土地が年々好きになる。この土地が語る歴史を、私は受けとめ記録してゆきたいと思ふのである。

参考資料

- 記念誌（石狩花畔土地改良区南線地区）
- 花畔の百年（花畔開村百年記念行事協賛会）
- 二十周年記念誌（花畔土地改良区）
- 記念誌（樽川酪農組合創立三三周年）
- 南線地区開拓記念碑設立趣意書
- 石狩湾新港地域の開発概要（以上、阿部重利氏蔵）
- 創立一〇〇年（石狩小学校）
- 妊娠分娩にまつわる産事風俗の変遷

石狩町の大字・字(町)について

—その一—

(未定稿)

田中 實

石狩は、松前藩時代には西蝦夷地に属し、石狩場所、石狩元場所、石狩直領場所などと呼ばれていた。寛政年間においては、蝦夷地で漁獲された鮭の約三分の一は石狩川で獲れ、石狩はその本拠地として既に西蝦夷地第一の繁栄を唱われ、幕末期には奥地探検の中継地として重要な位置を占めておった。このため幕府は石狩勤番所を設け、西海岸中央部や石狩十三場所のほか北蝦夷地(現在のサハリン)を統轄したので、石狩川口には百余戸の和人が来住し、花街が生まれるほどの盛況ぶりであったといわれる。

一八六九年(明治二年)八月十五日、明治新政府は蝦夷地を改めて北海道と称し、十一国八十六郡とし開拓使及び一省一府二十六藩八士族三寺院に分割支配させた。このとき旧石狩十三場所は、石狩国となり札幌、樺戸、空知、夕張、雨竜、上川の七郡に分れた。(注—石狩国は外に厚田、浜益の二郡が加わり九郡)。

同年八月十七日、石狩、高島、小樽の三郡は開拓使と同格の兵部省の管轄となり、兵部大録井上弥吉(長州藩士)が着任し石狩を本拠として三郡の経営に当った。

一方、開拓使判官島義勇(佐賀藩士)は石狩を通らず十月十二日海路銭函に至り、同地に仮役所を置き陸路札幌に入り札幌本府経営に着手した。この両者間の経営には藩閥感情が加わり、開拓使、兵部省の不和が相続いたので、政府は翌三年一月八日兵部省支配の三郡を廃し開拓使の管轄としたため四月十七日、井上・桜井の両兵部大録は岩村判官に引継いで石狩から退去した。

この頃石狩(市街)は、「石狩表」とか「石狩府」と呼ばれていたが、この抗争が原因したわけかどうか村とも町ともならずただ「石狩」というだけであった。

(注—一八六五年(慶応二年二月十八日にオタルナイ場所は村並となり惣足内村と称した。また、明治二年四月から五月には札幌周辺に庚午一・庚午二・庚午三の各村及び札幌村が開かれた)。

一八七一年(明治四年)五月には、盛岡県岩手郡移民により花畔村が、陸前国宮城郡移民等により生振村がそれぞれ岩村判官の命名で開村したが、石狩(市中)は同年九月に開拓使石狩出張所が設けられ札幌本府建設、石狩川中・上流部開発の中継地として重要度が加わったにも拘らず村にも町にもならないまま置かれた。

ところが同年四月四日戸籍法が定められ五年二月一日から施行とされたことから(注—いわゆる壬申戸籍)、七月十四日開拓使は戸籍法の制定にもなう心得方を布達した。このため石狩(市街)にも町名及び番地を付ける必要が生じたため、開拓使に対し次の伺いが立てられた。

「当郡の儀石狩国石狩郡石狩と相唱へ是まで町共村共相定兼ね有

え候へ共所かぎり市中と唱へ居し処先般市中名目も相除き置候処今般戸籍御改の儀に付銘々永住割渡地面まで番号相記し置べき申旨田中権小主典申聞ケ候

右に付思迄所限りの町名も三四ヶ所相唱居候間何町一番地より相記し始候方然るべき哉と存奉候間石狩町と相唱候間然るべきや此段奉伺候也」(注―田中義信権小主典)

これが石狩町というようになったきっかけであり、石狩町は他の町村の沿革のように部落から村となり町となる経緯をたどらず最初から町名が付されたのである。

そして、明治四年九月十八日石狩町を左の十カ所に区分することが認可となった。

親船町・船場町・弁天町・横町・本町・仲町・新町・浜町(注―石狩川左岸市街)

若生町・八幡町(注―石狩川右岸市街)

この命名者は、町役人の名主若田甚兵衛・年寄新兵衛及び百姓代土田宇兵衛といわれる。

明治五年の戸数及び人口は、石狩市街(親船町外九町)二一三戸、六三七人、花畔村三五戸・一二六人、生振村二九戸・二八人、合計二七七戸・八九一人であった。(注―同年北海道世帯数二四、七四四・人口一〇一一、一九六人。札幌戸数五五六、人口九一六人)

前記のように現在の石狩町域は、当時十町二村に命名されたので、石狩町の名称は正式文書には使われず石狩郡親船町とか石狩郡花畔村等と呼称された。一八八二年(明治十五年)二月七日に樽川村が

開村されるに及び同年親船町に「親船町外九町三村戸長役場」が設置され、次いで一九〇二年(明治三十五年)には親船町外九町と生振村を合して「石狩町」とし、花畔村と樽川村を合して「花川村」とし、それぞれ二級町村制を実施し、その町村共同事務処理のため「石狩町花川村組合役場」を親船町に設け、自治の基を開いたのである。さらに、同四十年に石狩町と花川村とを合併して「石狩町」を設置、一級町村制を施行し独立自治体を組織するに至り、一九四七年(昭和二十二年)四月十七日地方自治法施行とともに現在に至っている。

石狩町の名称は、明治三十五年から四十年に確定されたものであるが、それに先立つ、一八八〇年(同十三年)二月一日現在の各町村戸数及び人口は次のとおりである。

親船町六五戸一三一人、船場町三七戸七四人、弁天町五五戸一七七人、横町二〇戸四六人、本町二四戸六七人、仲町六戸一人、新町三二戸八八人、浜町一六戸六四人、若生町三二戸一一五人、八幡町八戸三七人、花畔村四一戸一四九人、生振村三三戸一四九人で合計三六九戸一、一〇八戸である。

(注―戸数は本籍・寄留と一社四寺を含む。人口のうち土族は二三人、平民一、〇九五人で男五七六人、女五一九人である。資料は、石狩郡副戸長鈴木徳右エ門より開拓使への届書。)

その後の石狩町は明治中期以降の鮭の薄漁、河口の不安定による海運業の衰退、相続いた幻の港湾計画の一方、農業の振興、石油鉱盛況による一時的な人口増があったが、大正期から昭和期の前半ま

では、道開発の波に乗り切れず農漁業の町として一進一退を繰返して来たのであるが、昭和三十年代後半から隣接する札幌市急発展の影響を受け、その地理的優位性が次第に脚光を浴び、大規模住宅団地・木材工業団地の開発を導火線とし、第三期北海道総合開発計画の先導的プロジェクトである石狩湾新港の建設と約三千ヘクタールに及ぶ工業・流通団地の開発計画、道住宅供給公社による花畔団地の開発計画の実施により、にわかには都市化の方向に進展し急成長を示すに至ったのである。

しかし、新港建設にともなうて一九七五年（昭和五十年）四月十五日樽川村の一部八九九ヘクタールが小樽市域に変更になったり、大規模住宅団地の人口増により一九七六年（同五十一年）十二月一日には花畔村、樽川村の一部の字名を改正し、花川北・花川南となり、それぞれに条丁目を付すとともに、その南東側周辺を花川と改正し、市街化の拡大等により翌五十二年四月二十日に花川の一部を花川南に変更し、同年十一月一日には花畔村の一部を花川北に変更した。

このような経緯のなかで、現在の大字・字名は次のとおりである。

- 大字親船町―字ヤウスバ、字大綱、字西浜
- 大字横町
- 大字船場町―字ヤウスバ
- 大字弁天町―字西浜
- 大字本町
- 大字仲町
- 大字新町

大字浜町―字堀神

大字若生町―字ヤウスバ

大字八幡町―字高岡、字大曲、字高岡五ノ沢、字高岡地蔵沢、字

高岡五ノ沢、字シラトカリ、字俊別、字米札

大字生振村―字茨戸太、字美登位

大字花畔村―字マクンベツ、字トウヤスンビ、字茨戸太、字オタ

ピリ

大字樽川村

花川北一条 自一丁目 至五丁目 花川北二条 自一丁目 至六丁目

花川北三条 自一丁目 至六丁目 花川北四条 自一丁目 至五丁目

花川北五条 自一丁目 至三丁目 花川北六条 自一丁目 至五丁目

花川北七条 一丁目

花川南一条 自一丁目 至五丁目 花川南二条 自一丁目 至五丁目

花川南三条 自一丁目 至四丁目 花川南四条 自一丁目 至四丁目

花川南五条 自一丁目 至四丁目 花川南六条 自一丁目 至四丁目

花川南七条 自一丁目 至四丁目 花川南八条 自一丁目 至四丁目

花川南九条 自一丁目 至四丁目 花川南十条 自一丁目 至三丁目

花川

（注）「改訂版北海道市町村行政区画便覧」（北海道行政協会発行、昭和五十五年四月現在）を基とした。また、同便覧には、「大字、字（町名）は原則として地方自治法第二六〇条の規定により、知事が告示した名称とした」とある。

一方、一世紀余の町沿革のなかでは、前記以外の大字・字のあつ

たことが土地台帳から知ることができる。すなわち、大字親船町では、北・南・字浜中・字堀神。大字船場町では、字マクンベツ・字上テ井子・字下テ井子。大字本町では、東・西。大字横町では、北・南。大字弁天町では、北・南・字大綱。大字仲町では、北・南。大字浜町では、西・東・字下堀神・字来札。大字八幡町では、西・東・字高岡三ノ沢・字シップ・字シップ中島・字聚富・字若生・字地蔵沢・字八幡・字高岡シップ・字中島シップ。大字若生町では、東・西。大字花畔村では、字シビシビウス・字ウツナイ・字ヤウスバ・字上トウヤウス・字トウヤウス・字中モシンレップ・字下モシンレップ・南・北・字西浜。大字生振村では、字マクンベツ・字ペケレトシカ・字トウヤウス・字花畔・字上花畔・字下花畔・字ピラカヤウス・字下モシンレップ・字モシンレップ・字茨戸。大字樽川村では、東・南・西・字樽川原野・字樽川・字軽川原野・字軽川・字分別越である。(注)高崎正方氏・一ノ瀬隆氏の調査を基とした。

また、樽川村の一部で小樽市域に変わった区域には、字分部越・字分部義・字白川・字小樽内川・字白井川・字オタナイがあった。

さらに特記すべきは、明治初期頃の召募移民により各村名が付されたなかで、一八八五年(明治十八年)山口県移民により高岡が開かれたが、村名が付されず大字八幡町の字名高岡等となった理由は分らない。在町の地方史研究の先達者である長谷川嗣氏のノートによると、「拓殖課の石狩郡各町村土地台帳には、樽川村のなかに同村高岡と記入されており、これからしばらくは大字生振村字高岡ともなつて居た」とあり、同氏は「開拓使の役人が高岡がどこに所在

するか知つて居なかつたらしい」と記しておられるのが興味をひく。当町の大字・字(町)のなかには、松前藩時代から明治期の石狩川筋鮭場所名や、明治期の海面鮭場所、開拓地の状況、地形等から付けられたものがあり、土地台帳には特に多く残っており、この地名解により往時の状況を伺い知ることができる。(未完)

昭和五十八年度 石狩町郷土研究会々員名簿

(理事)	花田 知也	弁天町一
(理事)	前川 道寛	生振村三線北
(副会長)	高木 憲了	花川南二条五丁目一六五
(副会長)	福田 佐市	花畔村北一四線
(監事)	沖本 義久	八幡町字高岡
(監事)	金子 仲久	花畔村北一一線
(理事)	長谷川 嗣	生振村七線南
(理事)	吉田 重男	生振村三線南
(会長)	阿部 徹雄	花川北六条三丁目七
(監事)	山口 福司	花川北四条二丁目一五〇
(副会長)	鈴木トミエ	花川北五条三丁目二四一―二八
(副会長)	駒井 秀子	花川北四条四丁目一六
(理事)	岡崎源次郎	花川南一条四丁目八八
(理事)	吉本 愛子	花川北三条四丁目四一
(會計)	吉野 惣栄	生振村九線北
(會計)	石橋 孝夫	親船町字ヤウスバ二七―二七二
(會計)	大島 龍	親船町字ヤウスバ
(會計)	黒田 晶子	親船町字ヤウスバ
(會計)	畑宮清一郎	花川北五条二丁目五〇
(會計)	青木 隆	花川北五条三丁目六六

いしかり曆 第四号

昭和五九年二月二十五日 発行

発行者 石狩町郷土研究会

編集 「いしかり曆」編集委員会